

とか一婦多夫とか云ふ時代であります、
前述の通りで婚姻の意義は幾多の變遷を経過した
る後、始めて今日の意義をなすに至つたのであり
ます。

家庭閑話

その子

▲猿の物真似とはよく人の口にする事なれど、
真似るは獨り猿のみならず、幼兒も中々此性質に
富めるものなり、人の振りを見てそを真似ること
心からよりすることならず、従つて意志ある行爲
とはいはれずとも、度重なれば、やがては悪しき
習慣も善き夫も、共に之よりぞ造らるべき。
▲可笑しき話として、友の語るを聞き侍り、何より
も菓子を齎み給へる父君の、さすがに幼子には、

この習慣を與へんことの心苦しく、さうして自ら
はそれを廢せんこともなし難くて、さまざま案じ煩
らへる末、幼兒に見せまじとて、押入の中に頭を
つっこみながら、菓子食ふことを始めけるに、何
時の間に見たりけん、其頃より何を與へても、其
幼兒、いつもく押入に頭をつき入れねば、食は
ずなり行けりとぞ。

▲家に歸りて、何かと妻に當り散らす夫は、外に
在りては權力を振ふに由なき人なり。家に在りて
常に妻に壓せらるゝ夫は外に出で、目下の者を遇
するに必らず苛酷なりと、或人の語られし。

▲落語家の講臺に上りては、いつもくも可笑し
き滑稽に人を笑はせ面白き顔を見せては人を喜ば
すを見て、さる婦人の、あはれ、かゝらん男に嫁
したらんには、家庭は、とこしへに春の海の穩か

にこそあるらめとて、やがて結婚したりし曉に至れば、思ひしことは秋の空のいと變り易くて、毎日く濫面作れる夫の顔に、そも如何なる譯でと詰り問へば「さればなり、講臺に出ては、面白き顔や話に人の機嫌を取るべき身の、家に歸れば、濫面作りて保養をなすも、強ち無理ならぬのことならずや」といひたりとなん。

▲妻を苛める夫こそいと心得ね、よし喧嘩口論理屈に勝ちたりとて、現在我妻ならずや、章魚といふ魚、漁夫に捕らはれて、我と我身を食ふところ聞け、かゝる夫は、之にも似たらずや。まして子供などある父の。

▲佛蘭西のルツンといへるは名高き學者にて、其人の書きたる教育の書など、普く世界各国の人にもてはやさるゝ程なるが、此人の素行につきて

は幾多の非難あるが中にも、少々折、所々に流寓して幾人かの幼兒を儲けたりしに、悉く之を養育院に送りて、自らは一人も養ふ能はず、さて云ふ様、父たる權なき我は又父たる義務なしと、其事の理性を没し、道徳を没し、人情を没したるはいふまでもなし。然れども、子を儲けて然も親たる權能なき者は、まことに此悲痛慘憺たる言葉に願みる所あらざるべからず。

今いろいろは料理

石井泰次郎

(二)

天狗どうふの拵方

天狗どうふとは、拵方の奇妙にして、最も手早く飛鳥の如き仕方なるより、名づけし物ならん、先